

十返舎一九の

江戸見物



十返舎一九は、滑稽戯作者として名高いが、本領は、むしろ狂歌にあった。本書「江戸見物」は、狂歌道中記ともいうべき『諸金草鞋廿四編』の初編である。付録、五郎清春の『江戸名所百人一首』は、江戸移入を示す好個の資料であり、絵江戸見物のはしりでもある。校注 鶴岡節

〈校注者〉 鶴岡節雄（つるおか ときお）

1915年千葉県生まれ

主な著書「房総文人散歩」（千秋社）

「歴史小品 上総のくに」（総南文化研究会）

新版絵草紙シリーズ「十返舎一九の房総道中記」

「山東京伝の白藤源太談」「仮名垣魯文の成田道

中記」「十返舎一九の甲州道中記」（以上千秋社）

現住所 〒298 千葉県夷隅郡大原町新田3537

☎04706（2）1938

新版絵草紙シリーズV

十返舎一九の江戸見物

印刷 昭和五十七年一月一〇日

発行 昭和五十七年一月一五日

校注者 鶴岡節雄

発行者 能勢 潔

発行所 千秋社

〒101東京都千代田区西神田三一九一四
☎〇三（二六四）六七一八（代）

印刷 図書印刷

ISBN4-88477-058-7 C0093 ¥1200E

落丁・乱丁の際はお取り替えます。

新版絵草紙シリーズV

十返舎一九の

江戸見物

校注
鶴岡節雄

目次

—江戸見物—

発端	7
千住〈足立区〉	8
馬喰町〈中央区〉	10
堺町芝居・葺屋町芝居〈中央区〉	12
日本橋魚市〈中央区〉	14
芝神明宮・愛宕山〈港区〉	16
虎之御門〈千代田区〉	18
神田明神宮〈千代田区〉	20
湯嶋天神〈文京区〉	22
東叡山〈台東区〉	24
不忍弁天・山下〈台東区〉	26

浅草観音〈台東区〉 30

待乳山聖天〈台東区〉 32

新吉原〈台東区〉 34

馬喰町〈中央区〉 38

両国橋〈墨田区〉 40

深川八幡宮〈江東区〉 42

羅漢寺〈江東区〉 44

かめろ戸天神・妙見宮〈江東区・墨田区〉 46

向嶋武蔵屋〈墨田区〉 48

角田川・梅若古跡〈墨田区〉 50

真崎稻荷〈荒川区〉 52

王子〈北区〉 54

たきの川・護国寺〈北区・豊島区〉 56

ぞうしがや〈豊島区〉 58

堀之内〈杉並区〉 60

山王〈千代田区〉 62

増上寺・目黒不動〈港区・目黒区〉 64

付録 江戸名所百人一首 67

— 解題 —

一九の狂歌道中 84

十返舎一九の江戸見物

凡 例

一、本文「江戸見物」付録「江戸名所百人一首」は、国立国会図書館所蔵本を底本とした。ただし本文「発端」の小題は、便宜上追加したものである。

一、本文は読みやすいように句読点をいれ、名詞、固有名詞の部分は、なるべく漢字を当てた。付録は地文を省略し、百人一首の原歌をいれた。

一、参考資料は、文中にあげたもののほか、小学館『東海道中膝栗毛』、角川書店『川柳・狂歌』、展望社『浮世絵の画人伝』、NHKブックス『江戸の本屋さん』、『江戸西北郊郷土誌資料』、川崎房五郎『江戸わがふるさと』などを参考とした。

発端

(1) ばくろ町式町目 錦森堂上梓
(3) 文化癸酉孟春 十返舎一九志 初編合一冊



一 東都見物左衛門 三人
シテ男藍の紋付の布子、柳行李をせおひ、
すべて旅装束
アド僧紺の木綿八徳、これも旅の装束出立
案内者伊勢縞の布子、紺のもゝひき出立

▲シテ 罷出たる者へ、ずんと奥の山家の者でござる。われら狂歌執心でござれば、狂名を、はな毛ののびたかと申て、おそらく田舎でハわれらにつゞくものハござるまい。されども歌人居ながら諸国の名所をぞんぜぬほどに、このたびおもひたち、先、大江戸一見いたそふとぞんじて罷越てござるが、さて／＼一人旅と申すものハさびしいものでござる。いやさいわいの事じゃ、あれへ行るゝ僧がござる。言葉をかけて同道いたそふとぞんずる。のふ／＼さきな人、またしませ▲アド僧 こなたの事でござるか▲シテ いかにも、そ

- (1) ばくろ町一馬喰町。中央区日本橋。
(2) 錦森堂一江戸地本問屋森屋治兵衛。商標森治。
(3) 文化癸酉孟春一文化十年(二八一三)正月。(陰曆)
(4) 志一誌に同じ。
(5) シテ一主人公たる演技を行う役。
(6) 布子一ぬのこ。木綿の綿入れ。
(7) 柳行李一やなぎで編んだ旅行の荷物を入れる用具。
(8) アド一主人公でない役。
(9) 八徳一宗匠や画家などの着た胴着の一種。
(10) 出立一いでたち。身じたく。身なり。
(11) 伊勢縞一伊勢の国から産した木綿織物。江戸時代、でっちのお仕着せに用いた。
(12) もゝひき一股引。腰から下部につけるズボンに似たもの。
(13) 執心一深く心をかけること。

なたのことじゃ。そなたハ、どれからどれへゆかします ▲アド 身どもハ奥の者でござるが、お江戸見物に罷出てござる ▲シテ 是ハいかなこと、身共もそのとをりじゃ、同道いたそふ ▲アド 一段とよふござろう。身共、名ハちくらぼうと申て、狂歌執心のものでござるが、このたび歌修行をおもひたつてござる ▲シテ さて／＼聞およふだ。ちくらぼうどのか。身ども、そなたと同国じゃ、はな毛の延高と申す者でござる ▲アド これハいかなこと、そなたもかくれのない人じゃ、さてもよい道づれをもとめてござる。なんとかやうに申てござる ▲シテ 何とめされた

▲アド 直語 ゑどさあへつん出来べいとよつばるかおもひ今度がはじめてのたび
▲シテ これハ一段とよふござる。身どもゝかやうに申しました

直語 国さあをやくとう出来てきせちないたびもあだけて氣ばらしぞする
▲シテアド さあ／＼いかしませ／＼

(1) 千住

奥州のぐつと奥山家の狂歌師、はなげののびたか、ちくらぼうの二人つれ、道すがら、たがいに歌よみ、なぐさみつゝたどりけるほどに、やがて江戸ちかき千住の宿^{しゆく}につきければ、はや日くれまへにて、宿屋^{やど}の女ども、家ごとにたち出て、

(14) いかなこと―「如何なる」の転。

(15) 出来る―(一九の方言解。以下「方」と略す。三十七頁の絵参照) 出てくる。

(16) よつばる―よつびく

(17) やくとう―(方) わざ／＼。

(18) きせちない―(方) なさけない。

(19) あだけ―(方) あだける。おどける。

(1) 千住―足立区。品川板橋、新宿とともに江戸四宿の一つ。準公認の遊女街があった。



二人のそでをひつとらへ、両方へひ
つぱりければ、ちくらぼう、即席に
一首の狂歌を口ずさみける
匪しゆくの名アきけバ千住くはん音
か(2)がゐに腕さあ出してひこづる
このところより馬喰町の宿引にい
ざなはれ、蔵前通りをまっすぐに、
馬喰町へとつきたりける
「わっちが所ハ、馬喰町二丁目さ、
お国のお方の定宿、そまつなことハ
いたしませぬ。これからおともいた
してかへりませう」旅籠(6)さあやすく
してくれさい。そのだいにヤア飯ハ
十四五杯に、御汁(7)を七八杯かへてく
やアほかにあんでもいり申さぬ「わ
しハ楽坊主(9)だから、精進(10)ハしませぬ。
魚をふんだんにくハせさっしやい

- (2)がゐー我意、強情、
やたら、
(3)ひこづるー引摺りこ
む、ひつぱりこむ、
(4)宿引ー旅客を宿屋に
さそい、宿泊をすす
める人、

- (5)定宿ーとまりつけの
宿屋、

- (6)旅籠ーはたご銭、

- (7)だいーかわり、

- (8)あんでもー何も、

- (9)楽坊主ーのんき坊主、
(10)精進ー魚肉などを食
べず、心身を清める
こと、

- (11)ふんだんー不自由な
く十分であるさま、

馬喰⁽¹⁾喰^{くろ}町^{てう}

馬喰町の宿^{やど}につき、二人ハそのまゝ銭湯⁽²⁾へゆきけるに、江戸はじめての者ども、かつてをしらねバ、女湯のかたへずつとはいり入らんと、番頭見つけて、もし／＼こゝハ女湯だから、そこをあけて、あちらの湯へお出と、男湯のかたへゆく出口ををしゆるに、戸がしまりてあるゆへしれず、二人ハ湯をくむ口のあいてゐるところを、そここゝろへ、四つばいになつて、そこをくどり、ずっと出た所が湯屋の台所、飯たき女が釜^{かま}をあらつてゐるところへ、二人丸裸にてずつといで、きよ／＼しながら、これハは、道がちがつたんべい、わしどものつっぱいる湯さあ、どっちへいき申すといふに、三助⁽³⁾見て、とうもない人だ。湯屋へきて、湯へハどふいくたアおかしい。その湯の口をくゞつて、そつちらへ出なせへといはれて、こりヤはあ、またそこさあくゞるべいかと、やう／＼のことにて男湯のかたへ出ると、さきへはいる人、ハイ御めんなせへ、田舎もんでござりやすといつてはいるをきゝて、こりヤアお江戸でハ、国、所をなのつて湯へはいるそふだと二人ハ石榴口⁽⁴⁾をくゞると、ハイ御めんなさろ、わしどもハはあ、奥州仙台岩沼⁽⁵⁾の者でござり申と、ことわりてはいりながら、さすがハお屋敷つき合をするお江戸ほどあつて、かたいことだと感心しながら、また狂歌をよむ

(1) 馬喰町―中央区日本橋馬喰町一―二丁目

町名は牛馬の売買、仲介を行う幕府博頭高木源兵衛、富田半七が居住していたことによる。馬市の

たつ町で一―四丁目があり、三丁目北側に初音の馬場があつた。四丁目北側(現在の二丁目)は関東

那代の屋敷や明治以後は諸県の出張所となつた。江戸時代から旅館が集中していたが、鉄道駅がないことや大震災、戦災で古い旅館は姿を消してしまつた。

(2) 銭湯―ふる屋。

(3) 三助―湯屋で浴客のあかを洗い落とす下男。

(4) 石榴口―ざくろぐち。江戸時代、湯屋で湯のさめるのを防ぐため、湯船の前面の左右、柱の間に板を張り、浴客がその下から出入するようにしたものの。

(5) 岩沼―陸前。現宮城県。



「五」こりヤアはあおゆるしなさるぶ

しつけない はだかで湯さあへは

いり申すハ

男「コリヤア旦那^{だんな}ハとんだおやせな

さった。どふでも女のおもひでござ

りやせう「イヤそうでもねへ

「たどしハ⁽⁶⁾かけとりのおもひだもし
れねへ

番頭「今の二人ハ、田舎者だそふ

な。二階へお出なせへといったら、

二階にも湯がありますかといひやし

た

「番頭さん、膏薬^{めいやく}をくんな。銭ハ明^あ

日^{した}もって来やせう

「ちとどこぞへ出かけたいとおもっ

ても、わたしが所の隣衆^{かみし}ハ、とかく

ちと^{*}の間もわたしをはなさねへか

らこまりはてます

(6) かけとり―掛取。掛
売の代金を受取りに
回る人。

(7) 膏薬―薬品をあぶら
でねった外用薬。

(1) さいかいとうしばる (2) ふきやてうしばい
堺町芝居・葺屋町芝居

かの二人ハ翌日から案内の人をたのみ、まづ当年の恵方(3)なればと、芝の神明、愛宕(4)のほうからはじめんと、馬喰丁を出て、人形町通り堺町、葺屋町の芝居大はやり、見物おびたゞしきを見て肝をつぶす。案内の男、なんとお国へのお土産に一幕どふでござりやすといへば、はなげののびたかきゝて

狂国(5)さあへみやげにしろといひめすが

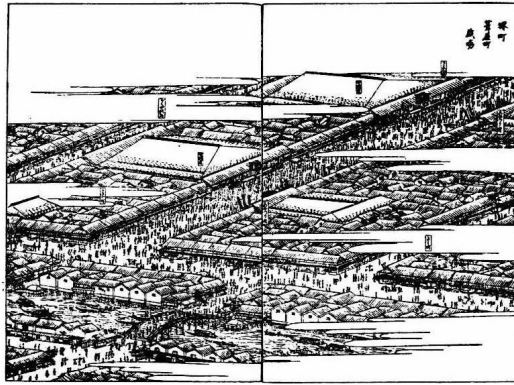
このしばあさあにもたれべい

芝居の門(6)にゐるものども、ちくらぼうをとらへ、やすく見せます、はいつて見なせへと、ひっぱれば

狂言(5)ハあんだかかんだかしらないが おもしろそうだんすべいくらだア

「サア／＼今が対面、あとが浄瑠璃(6)お出／＼

のびたか「あそこでいひ申したが、対面たアあんのこんでござる



江戸名所図会 (堺町・葺屋町劇場)

- (1) 堺町芝居・葺屋町芝居——堺町・葺屋町は現在の中央区日本橋人形町辺。堺町の村座のほか、木挽町の山村座・森田座は江戸四座と呼ばれた。
(2) 恵方——その年の歳徳神（としとくじん）のある吉祥の方角。
(3) 人形町——中央区日本橋。
(4) 狂言——歌舞き芝居の仕組。脚色。転じて芝居。
(5) 浄瑠璃——「語り物」と称される三味線音楽。又その詞章。そのおもなものに義太夫節・豊後節・常磐津節・富本節・清水節・新内節などがあ



あん内「兄弟が、工藤左衛門にあふ
ことさ」

「あうことを対面といひ申すか、わ
し、⁽⁹⁾こんちう目がね一つひろい申た
が、うちとどうしの年輩の人さあか
けたと見へて、うらが目にもしっく
りと対面のう申た

「わっちゃア、ほかにねがひハねへ
が、三津五郎のやうな男をもつて、

おさつやはらぶともちをたんとたべ
たいものさ

「わたしヤアいっそ手水にたびく
いってならねへ、こんどから芝居へ
くるなら、⁽¹⁰⁾渡瓶のかわりに、⁽¹¹⁾薬研で
ももたせて来やせう

(7) 兄弟―「曾我物語」の
兄十郎(祐成)、弟五
郎(時政)、父は伊藤
祐親の嫡子河津三郎
祐重。
(8) 工藤左衛門―所領争
いから河津三郎祐重
を殺した工藤祐経。
(9) こんちう―此中。

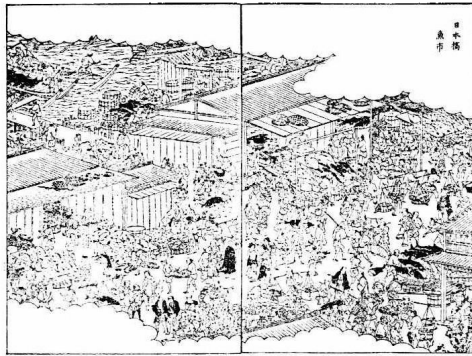
(10) 三津五郎―坂東三津
五郎。役者。
(11) おさつ―「さつま
いも」の婦人語。
(12) はらぶともち―腹太
餅。大福餅の前身。
皮うすく、赤小豆を
塩だけで味づけて入
れた大形の餅。
(13) 手水―便所。
(14) 渡瓶―しゅびん。尿
器。
(15) 薬研―くすりおろし。

(1) 日本橋魚市

葺屋町から親父橋⁽²⁾をわたりて、江戸橋⁽³⁾の河岸通りを日本橋へさしかゝり、このあたりの魚市⁽⁴⁾を見せて、かの案内の男、なんと見なせへ、たとへにも小田原町しんばの魚市⁽⁵⁾を上方⁽⁶⁾のものに見せたよふだと、肝⁽⁷⁾のつぶれたことにいひやすが、この魚が、今の間にミなうれきってしまいやすへ、なんと豪勢⁽⁸⁾なものじゃアござりやせんか。そこにある鯛⁽⁹⁾を見なせへ、目の下が五尺ばかりもあらう。こんな鯛⁽⁹⁾さへじきにうれてしまいやすといへば、のびたか

「困⁽¹⁰⁾おやつかなそんなア鯛⁽⁹⁾がうれるなら、その錢⁽¹¹⁾うらがもらひたい」

あん内「イヤあつかましい。そんなことへ、おきつたいにしなせへ。このせちがらしいしほだいの世の中でも、ひだいくめんをして、魚⁽¹²⁾をかってくふものへ、花の江戸⁽¹³⁾っ子のさくらだい。他国⁽¹⁴⁾のかどミだいとなる繁盛⁽¹⁵⁾のところだものを、おめへがたのやうなかさこだいハござりやせぬ



江戸名所図会

魚市—船町、小田原町、安針町等の間、悉く鮮魚の肆なり。日夜に市を立て、甚賑へり。

- (1) 日本橋魚市—中央区。日本橋と江戸橋との間の北側に魚市場が並び日本橋魚河岸といわれてにぎわった。(2) 親父橋—現在の中央区小舟町一丁目付近にあった橋。小田原北条浪人庄司甚右衛門が東堀留川(埋立)に架けた橋。元和三年(一六一七)甚右衛門は、江戸の散娼を集め、吉原をつくったので愛称からその名がでた。明暦三年(一六五七)新吉原(現台東区千束)に移るまでの元吉原は人形町付近にあった。(3) 江戸橋—中央区。(4) 小田原町しんば—小田原河岸。現中央区日本橋室町一丁目うち。(5) 上方—京都及びその近辺の地方の称。京都が歴代の都であったからいう。(6) 豪勢—景気のいいこ



侍「イヤむかふからくるハ、かまぼこはん平どのそふな、これハ／＼まづ御あんかうでゆでたこぞんじます。かれるこれいたして御ふさばいたした。ちとこのほう／＼へもおこち下され、きすと御ちそういたしませう
「あのお侍が、ひしこそふに魚づくしで、あぢをやったな。こだいられねへ、おれもやるべい。あんかうどふしたこのしろハ、あハねへな、あなごハたっしヤか、ちつとぼらがほうへもきさっせへ、たらふぐごちそうをするめだが、どふだく
「ぼんにハ又橋詰の天ぶらをやらかすべい。あいつハうまいの天井だ
「おれハ鰯を見ると、しんだ噂のことおもひだしてならねへ、あいつハ、おいしいことをした

- と。
(7) おやつかなー「おやおつかない」の略。
(8) うら／＼己。自己の卑称。おれ。おら。
(9) おきつたい。「興津鯛」をかけたしやれ。
(10) しほだい。「しほかい」または「塩鯛」を「世代」にかけたしやれ。以下同様の掛ことば。(11) (14)。
(15) かまぼこー蒲鉾。
(16) はん平ー半平。はんべん。駿河の料理人半平の創製にかかるという。かまぼこの一種。
(17) 鮫鱈。(18) 茹で蛸。
(19) 鰯。(20) 鰯。(21) 魴鰯。
(22) 鰯。(23) 鰯。(24) 鰯。
(25) 鰯。(26) 小鰯。(27) 鰯。
(28) 穴子。(29) 鰯。
(30) 鰯、河豚。(31) 鰯。
(32) 橋詰ー橋ぎわ。